

「……ただの同僚？ あんな距離でスマホ見せ合って、  
楽しそうに笑って……俺、ずっと見てましたよ」

嫉妬が声に乗って、動きがさらに強くなる。

美咲さんの腰が勝手に動き始めて、俺に合わせて押し返してくる。

「……あぁっ……悠斗くん……意地悪……っ」

「……意地悪？ 美咲さんが悪いんです。

俺以外にそんな無防備な顔見せて……お仕置きですよ」

乳首を後ろから摘まみながら、耳元で続ける。

「……美咲さんのここ、俺の指で開発したのに……

他の男に触られたらどうするんですか？」

美咲さんの体が硬直して、

「……触られないよ……悠斗くんだけ……っ」

パシヤッ

熱い潮が勢いよく溢れ出して、玄関の床に滴り落ちる。

俺はその反応に、さらに嫉妬と興奮が混じって、腰を止められない。

「なんで……なんで……いきなり挿れられたのに……」

……こんなに感じてるんですか？ 美咲さん……」

そう言いながら、俺は激しくバックで腰を打つ。

パンパンッ

「あゝっ……ゆう……とく……ん………激しっ……あゝあゝ………ん！」

美咲さんは息をするのに必死で、野太い声を出し始めた。

じわじわと潮が漏れて足がガクガクしてきたのを確認すると、彼女を抱き上げてベッドまで運び、正常位で深く挿入し直す。

